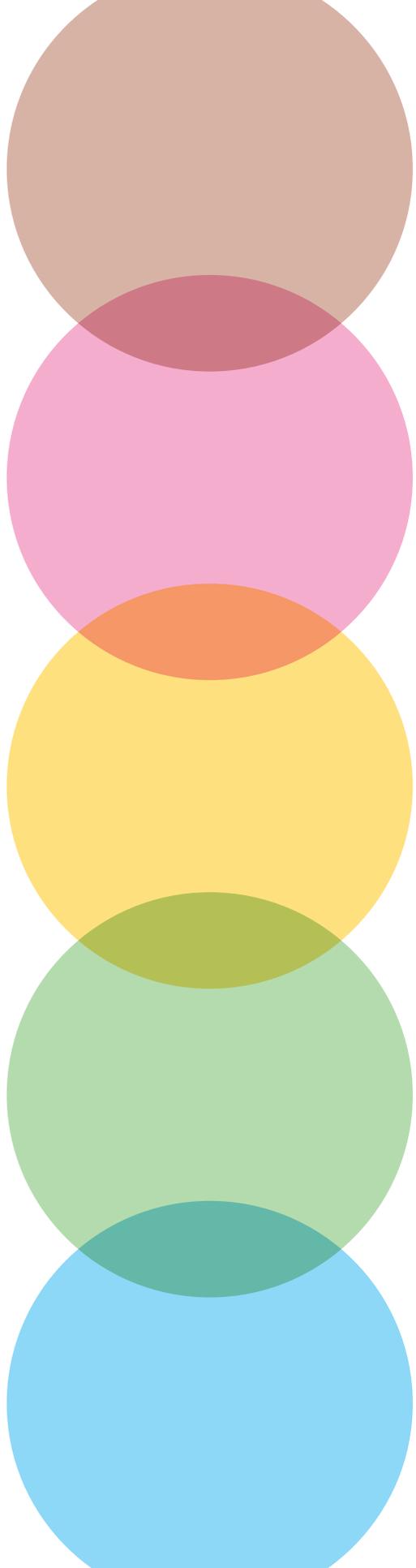




としまアートステーション構想 豊島区×NPO法人アートネットワーク・ジャパン×東京アートポイント計画

子育てをめぐるタテの対話



阿部初美

「としまで子育て 子育てを考えるワークショップ」ドキュメント

目次

2 はじめに

参加者の声

ワークショップ

- 3 ワークショップについて
- 4 **テーマ1** 子育てについて考えていることを話す
- 5 **テーマ2** 本を紹介する
- 6 **テーマ3** 子どもを感じる
- 7 20代の意見「結婚や子育ては考えられない」
- 8 **テーマ4** 子どもの頃の一番古い記憶を思い出す

31 「子どもを持つっていいな」と思えるようになりました
池上綾乃

32 ワークショップの持つ力
蓮池奈緒子

33 自己実現的な社会への疑問
森隆二郎

34 世代間の差の大きさを実感
石川佳代

発表会 ランチdeディスカッション

- 9 発表会について
- 10 第一部それぞれの生き方
- 16 第二部その選択の背景にあるもの
- 23 ディスカッション
- 27 リーディング

35 『子育てをめぐるタテの対話』ができるまで

阿部初美（演出家）

43 ワークショップという名の演劇作品

佐藤慎也（としまアートステーション構想ディレクター）

45 基本データ

はじめに

としまアートステーション構想事務局

この『子育てをめぐるタテの対話』と題された冊子は、豊島区を舞台に展開している文化事業「としまアートステーション構想」のアートプロジェクトとして実施された、演出家・阿部初美さんによる「としまで子育て 子育てを考えるワークショップ」のドキュメントです。

「としまアートステーション構想」は、東京都、豊島区、東京文化発信プロジェクト室、NPO法人アートネットワーク・ジャパンの4者によって実施されているもので、豊島区民をはじめとする様々な人たちが、区内の魅力あふれる場所で地域資源を活用し、アート活動を展開できる「環境システムの構築」と、それによる「コミュニティ形成の促進」を目指しています。この地で「何かをはじめたい」という人たちの想いをつなげるシステムをつくることによって、自然に発生したささやかな活動を結び付け、豊島区を人や街とともに暮らすことができる街にするためのアートを用いた試みです。

この「としまアートステーション構想」の考え方に共鳴した阿部初美さんを迎え、様々な世代の参加者と、地域や社会の中における社会的課題「子育て」について考えるワークショップをおこないました。演劇的手法を用いて、参加者とともに子育てを考え、最後には、映像インタビューやリーディングを交えた発表会を開催するというプログラムです。そして、ワークショップへの参加が、次の活動のきっかけとなることを意図しています。

このワークショップには、実際に子育てを経験した母親だけでなく、男性も含む20〜60代の様々な人たちが集まりました。ワークショップの中で練り広げられた、上の世代と下の世代の「子育てをめぐるタテの対話」が、このドキュメントには収められています。そんな場をアート（演劇）によってつくり出したことが、このワークショップの一番の成果ではないでしょうか。みなさんがこのドキュメントを読むことで、これをきっかけとした、さらなる対話が続くことを期待しています。

子育てについて考えていることを話す

まずは参加者全員が輪になって、互いの名前を呼び合い場所を入れ替わるゲームで身体を動かして緊張をほぐしてから、自己紹介をおこないました。そしてなぜこのワークショップに参加したのか、また子育てについて考えていることを自由に話してもらったところからはじまりました。

20代・女性

子育てについてはまだほとんど考えたことがない。結婚願望もないし、子どもを産むことは全く想像できません。

30代・女性

子育ては本当に大変ですが、子どもにはすごく幸せをもらっていて、本当に素晴らしいことだと思っています。私は子どもを産んで、女性に生まれてよかったと初めて思いました。

40代・男性

子どもが生まれて、社会の見方が変わりました。子どもは大事なもので、社会の宝だと思いますが、やはり育てるのはとても大変。周りがサポートしなければいけないが、その整備が追いついていないですね。自分の職場でも、子どもを産んで復帰した女性はとても少ない。そこに自分がどうサポートしていけばよいのかを考えたいです。

50代・女性

成人した息子がまだ経済的に自立しておらず、“後期子育て”中。生きる力、精神的な自立ができていない若い人がたくさんいるのを何とかしないといけないと思っています。

60代・女性

現役イクバアとして、孫3人の子育てに関わっているため、自分にも吸収できる何かがあるのではないかと考えて申し込みました。

阿部さんコメント

初回はみなさんに、自己紹介も兼ねて参加動機や「子育て」について思うところなどをお話いただきました。今後のプログラムを考える上で、参加者がどんな意識で参加しているか、どんなことに興味があるのかを知っておくのはとても重要なことです。「としま」では、参加者の年齢層が厚いこともあって、本当に具体的な子育て奮闘生活にはじまり、若い世代の専業主婦志向、男女の平等不平等、戦後のGHQの政策からその後流行した『スポック博士の育児書』に代表されるアメリカ流子育て、公務員と民間人の違いとか、女性の職場復帰の難しさとか、いろいろな話が散らかって、本当に興味深く、まだまだ話し足りない3時間でした。

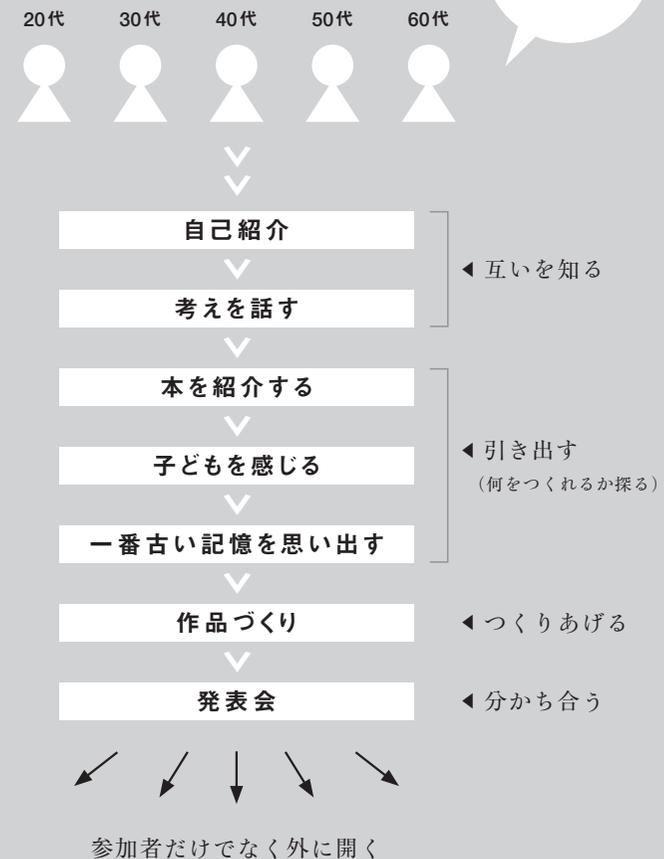


ワークショップ

2012年のまだ残暑が厳しい9月からはじまったワークショップ。区報などでワークショップへの参加を呼びかけ、育児中の方だけでなく学生、ビジネスマン、子育てを終えた方など、子育てについて考えたい方を募集したところ、20代〜60代までの幅広い年齢層のみなさんが集まってくれました。

阿部初美さんは舞台を中心に活躍する演出家。広く社会に目を向けたドキュメンタリー的な作品も数多く手がけています。その長いキャリアで培った演劇的手法を用いたワークショップのテーマは、「子育てについて考えていることを話す」、「本を紹介する」、「子どもを感じる」、「子どもの頃の一番古い記憶を思い出す」の4つ。各テーマに沿ってワークショップをご紹介します。

ワークショップのしくみ



Workshop Report

Theme 1-4



子どもを感じる

参加者が連れてきた子ども（11か月の男の子と10か月の女の子）をよく観察して、子どもの気持ちや行動を実況中継してみました。

1 「その子になったつもりでいまの気持ちを言うてみる」

- ここはどこ？ なんで大人がいっぱいいるの？
- 僕、もっと一緒に遊びたいよ！
- その時計がほしいよ！ キラキラしていて気になるな～



2 「客観的にその子の行動を説明する」

- オモチャを口に入れようとしたけれどやめました。
- ハイハイでママのところへ移動しようとしています。
- よいところを見せようと立ち上がろうとしています。

20代・女性

いままで、子どもはあまり積極的に欲しいとは思わなかったんですが、これだけ小さい子をずっと見つめていると、やっぱりとてもおもしろくてかわいくて、子どもが欲しいなあと思いました（笑）。

40代・女性

自分の子どもが小さい頃を思い出しました。子どもの時間の流れは大人とは違いますが、かつて自分がそれに合わせるができなかったことも思い出して、子どもの時間に合わせてゆっくりさせるような環境を整えられるとよいのだろうなと思いました。また、子ども同士で遊ばせていると、ママ同士のコミュニケーションにずいぶん気を遣うことがあったことも思い出しました。



阿部さんコメント

子育ての最中、ずっと子どものそばを離れられないことに苦痛を感じていたとき、ふと子どもの様子を実況中継してみたら、この子はこの子なりにいろいろなものに関心を向けて、世界とやりとりしているんだな、と子どもの時間を感じる事ができました。大人はいつも「少し先」のことを頭において行動しているけれど、子どもは「今」をすべてとして生きる存在で、大人の時間の流れ方と子どもの時間の流れ方はぜんぜん違ってきます。人間は、姿形や心の在り様が自分と似ていない人を、自分と同じ人間なのだと感じにくい生き物なのかもしれないと最近思うようになりました。演劇は古来から、どんな人も等しく同じ人間として扱い、そんなふうに関わりあうことはなれて見える他者の気持ちや考えを理解するのにとても役に立つ道具として使われてきました。俳優は他者を観察し、模倣することから「役」を創造します。まずは自分の固定観念にとらわれずに対象をよく見ることで、それは俳優ではない人にもできることです。

本を紹介する

参加者が、自分が紹介したい「子育てに関わる本」と「子育てについて考える本」を持ち寄り、気になる部分を読みました。

20代・女性

『i-wish ママになりたい女性のからだと産婦人科と』
不妊治療情報センター／シオン

「親になったら責任感を持って子どもを育てること」、また「地域で子どもを育てなければいけない」という文章があり、子どもを産むのも大変だけど、子どもを産んだあとも大変で、親になるということは責任が重いことだと思いました。



30代・女性

『産後白書』NPO法人マドレボニータ

日本は、妊婦と赤ちゃんに対してはすごく手厚くケアしてくれますが、産後の女性に対してのケアが充実しているかという点、そうではないんですね。この本では、産後の身体や性生活など、実際あまり語られていないことを調査をもとにリアルにまとめています。これから子どもを産む人、産んだ人がこういうものを読んで、自分だけが大変なのではないということを知ってもらえばよいなと思っています。



40代・女性

『はじめてであうすうがくの絵本1』
安野光雅／福音館書店

最初の章のタイトルが「仲間はずれ」で、絵の中にある仲間はずれを探します。ゆとり教育などは、仲間はずれはないんだよ、みんなで手を取り合って仲良くしていこう、ということをお話していたと思うんですけど、やはり現実には仲間はずれというか、それぞれの違いというものがある、その中でどうしていくかということ、この本は示しているような気がします。



阿部さんコメント

本の持ち寄りは、それぞれ参加者がどんなことに関心を持っているかを知る上でとても有効です。また自分のことはうまく話せないという人も、本の言葉を借りてなら話しやすかったり、参加者同士がお互いを知り合ったり、問題を共有したりするのにも役に立ちます。本を探す宿題は、子育て中で時間のない女性にとって、自分のための時間にもなります。参加者個人の具体的でリアルな生活の外からテーマを持ちこむので、視野も広がり、発表会に向けての表現の材料探しも兼ねていました。ここでは上の世代から辛口な本が持ち込まれたのが印象的でした。



60代・女性

『大人問題』
五味太郎／講談社

この本は、子どもをめぐる“大人こそが問題”ということを語っています。子どもをどうしようとする大人ばかりが多いけれど、そこには肝心の子どもがいないということが書かれています。



子どもの頃の一番古い記憶を思い出す

参加者に、子どもの頃の一番古い記憶を思い出して語ってもらいました。

20代・女性

小さい頃、名前を省略して呼ばれていました。私はそれを自分の名前とっていました。あるとき、少し離れて住んでいるおばあちゃんに「ちゃんとした名前があるのにそう呼ばれなくてかわいそうだ。じゃあ、ちゃんとした名前をつけてあげようね、今日から〇〇ちゃんだよ」と言われたんです。でも実はそれが私の本当の名前で、しばらくしてみんながそうやって呼んでくれるようになったのですが、私はおばあちゃんはその名前をつけてくれたからだと思っていました。

30代・女性

幼稚園のときの記憶がとても鮮明に残っています。幼稚園には橋を渡って通っていました。橋を渡るとき隙間から川が見えました。その川がすごく怖くて、自分が小さくなって隙間から吸い込まれる気がしていました。なので、橋を渡るたびに泣いていました。

40代・女性

3歳くらいのとき、自分がカプセルの中にあるような感覚を持っていました。シャボン玉のような閉ざされた空間に心地よく浸っていたという記憶があります。ご飯を食べるときも、自分の世界に浸りながら食べていたのですごく遅かったみたいです。

40代・男性

2、3歳のときおじいさんとおばあさんのところによく行っていました。病院におじいさんのお見舞いに行ったとき、ビニールみたいなものがベッドの周りであって、おじいさんには管みたいなものが通っていました。日常にはない光景だったことを覚えています。

阿部さんコメント

誰でも子どもだったはずなのに、大人になるとついそれを忘れ、自分の都合で子どもをうるさがったり、やっかいなものだと思ったりします。ここでは、子どもの頃の記憶を思い出すことによって、もう一度子どもの目線に戻ってみました。みなさんの記憶からは、「子ども」が大人とは全く違う独特の感覚を持っていることがわかります。「言葉」を持たない子どもの「世界」は、まだ「名前」によって分けられていないため、子どもは大人のような「フィルター」なしに開かれた感覚でダイレクトに世界を感じとっているということです。それは世界から「名前（既成概念）」をはずして対象と向き合おうとする芸術家と共通するものがあります。逆に言えば、「芸術家」とはいつまでも子どもの感受性を持ち続ける存在なのかもしれません。子どもも芸術家も大人の硬直した世界観に風穴をあけてくれる大切な存在です。



20代の意見 「結婚や子育ては考えられない」

3回目のワークショップ。この回は学生を含む20代が多く参加しました。未婚の彼女たちに、結婚や子育てについて思うことを話してもらいました。

[20代 からの感想・意見]

>>>>

[40代 からの感想・意見]

20代・女性

「いまはまだやりたいことがたくさんあって、自己実現もできていないので、将来が決まっていないうちは結婚や子育ては考えられません。結婚願望はありません」

20代・女性

「結婚はしたいと思っています。孤立するのは嫌なので。でも子どもを産むと仕事をやめなければならないイメージがあり、まだ考えられません。子どもと向き合っている間は社会と離れてしまうような気がします」

40代・女性

「やりたいことをやってから結婚するって言うても、じゃあ結婚って“やりたいこと”じゃないの？キャリアアップが自己実現だって本当なのかな…」

40代・男性

「自己実現という言葉が出ましたが、僕はその言葉にちょっと懐疑的で、自己実現はキャリアアップすることのみじゃないと思うんですね。それよりも家族という小さい単位のコミュニティを幸せにすることのほうが、リーズナブルで幸せに近いような気がします」



発表会

ランチ de デイスカッション

結婚・子育て、どう考えてますか？

10回に及んだワークショップの最終回を飾る発表会。これまでの成果をどのようにまとめて発表するべきか話し合ってきました。参加者の中には若い子どもがいる方もおり、全員が毎回必ず参加してひとつの作品を創るということは難しい状況でした。そこで参加者各人のインタビュー映像を撮り、併せて、それについてみんなで話し合う、【上映会&デイスカッション】という形式にしました。



Presentation

part 1
part 2

テーマは“それぞれの生き方”と“その選択の背景にあるもの”。“子育てを考える”ワークショップを進める中で浮かび上がってきた、子どもを産む・産まない、預ける・預けないなどの選択はその時代時代の影響を強く受けています。これからそのような選択が待ち受けている若い人たちのために、参加者のみなさんがおこなってきた人生の選択について語っていただきました。

ワークショップ参加者の家族や友だち、子ども連れの母親などが集まり、アットホームな雰囲気で開催がはじまりました。最後に参加者全員でリーディングもおこないました。



阿部

今日は第一部、第二部ともに映像を見ていただきます。いまから見る映像は、ここにいるワークショップ参加者のみなさんが、これから自分の人生を考えていく若い世代のために、自分の人生をサンプルとして差し出し、例えばこういう選択をしたらこういうことがあるんだ、というふう考える材料にしてもらうためにつくったものです。まず第一部ではみなさんの個人的な人生の選択についてのインタビューを見ていただきます。そして第二部では、その選択の後ろにどのような時代的・社会的・個人的な背景があったのかを見ていって、その上で、みなさんとお話ししていきたいと思います。自分の人生も重ねて思い返しながら見ていただけたらと思います。

第一部 それぞれの生き方

20代 女性 A

21歳で大学3年生です。年を取ってずっと一人でいるのは嫌なので、結婚はしたいとずっと前から思っていました。でも子どもを産みたいとはあまり思っていなかったです。社会に出て活躍したいという欲があったので、仕事を続けて子どもは産みたくないと思っていました。子どもを産むことと仕事を両立させるということは、正直あまりビジョンが見えませんが、ただこのワークショップに参加して、子どもを産むのもよいかと最近思いはじめました。

20代 女性 B

23歳、学生で未婚です。自分の人生において、結婚、出産、育児については何も考えていません。卒業したらとりあえず仕事に就いてお金を稼ぎたいです。これからどういう人生を送るかとか、あまり先のことは考えていませんが、とりあえず結婚をするつもりはありません。子どもも欲しいとは全然思わないので、多分これから一人で生活していくのかなと、

なんとなく思っています。老後も一人かなと思っっています。

20代 女性 C

23歳で学生です。まだ結婚経験はありません。出産や結婚は
いずかはしてみたいと思っっているんですが、自分はまだ学生
で経済的にも自立していないので、現実味を持つて考えられ
ないです。卒業して就職して、30歳になる前には結婚できて
いるんじゃないかと勝手に思っっています。子どもも30代前半
までに産めたらなと思っっています。

20代 女性 D

26歳です。働いています。私は結婚、子育てについてはいま
のところあまり具体的に考えられていません。結婚をすぐに
するつもりもないし、子どもを産んで育てたいとも積極的に
思っっていません。あまり先のことを想像できないんですけれ
ど、まあそれはそれでしょうがないかなというか……一人で
最期まで行くのならそれはそれで受け止める、という感じでは
す。

20代 女性 E

26歳です。結婚と出産と子育ては、いまは考えられないです。
仕事を始めたばかりで、目指している仕事をするからには
子育てはあきらめなければいけないと思っっていました。でも

このワークショップに参加して色々な人と話すうちに、子ども
もは欲しいなと思うようになりました。

30代 男性

いま30歳です。結婚していますが子どもはいません。現在公
務員で研究開発の仕事をしています。結婚したばかりですけ
れど、結婚生活がとても楽しいですし、30歳で結婚できたの
はとてもよいタイミングだったなと思っっています。

30代 女性 A

32歳です。大学を卒業してからずっと仕事をしていましたが、
結婚のことは特に考えてきませんでした。子どもが欲しいと
あまり思わなかったです。30歳手前ぐらいになってようやく
結婚はしたいなと思えるようになって、32歳のときに結婚し
ました。

30代 女性 B

34歳です。現在は非常勤ですけれど仕事をしています。大学
を出てからずっと子どもが欲しかったですし、もちろん結婚
もしたいと思っっていたんですけど、20代はとにかく仕事
中心な生活でした。気がついたら30歳をすぎてしまいました
が、よい人と出会って最近結婚することになりました。

30代 女性 C

34歳で、子育て中です。大学を出て同じ職場ですつと働き続
けていまに至ります。20代の間はとりあえず結婚する方向で
はない人生を歩んでいましたが、20代後半になって子どもが
欲しいと思いはじめました。33歳のときに結婚して子どもが
できました。子どもを産んで本当によかったと思っいます。今
後も仕事は続っっていくつもりです。

30代 女性 D

35歳で既婚者です。5歳の男の子が一人います。いまは専業
主婦です。短大を卒業して幼稚園に就職して、その後保育所
に転職しました。28歳のときに結婚をして、29歳のときに
産をしました。34歳のときに主人が東京に転勤になったので、
仕事を辞めてこちらに来ました。仕事の面ではすごく恵まれ
ていたと感じます。出産したときも職場で理解があったので
スムーズに復帰できました。仕事を辞めたときは、やりがい
があったものを奪われてしまったという喪失感がありました
が、これから自分のできる範囲で資格を取ったり勉強して他
の仕事に就いたりとか、そういうことを考えていきたいと思っ
ています。



30代 女性 E

36歳です。4歳と10か月の二人の女の子がいる母親です。仕事はしています。私は大学を出てからアルバイトとして働いたあと、契約社員として会社に入って転職しました。その後結婚して半年くらいで一人目の子を産みました。残業の多い仕事だったので辞めざるをえないのかなと思っていたんですけど、続けてもよいと言ってもらえて続けました。二人目は35歳のとき授かって、一人目同様に産休・育休を取って復帰する予定です。自分の人生を振り返って、よい旦那さんを見つけたし、子どもにも恵まれたし、よい選択ができてるなと思います。

30代 女性 F

37歳です。独身で子どもはいません。大学入学と同時に地方から東京に来まして、大学院を卒業しました。いろいろありましたが芸術系の仕事に就いて、続けています。結婚、子育てについては、少し憧れを持ちながらも、何となくネガティブなイメージを持っています。身のまわりの友だちなどの様子を見てみると、みんな共通して、仕事と家庭の二者択一みたいなことを言っているような気がします。それでどちらかを諦めるみたいなお選択をしていたりして、すごく苦しんでいる

ていけないといけないと考えるようになりました。

40代 男性 B

46歳で、結婚歴と離婚歴がそれぞれ一回ずつあります。子どもが二人います。大学生の頃から早く結婚したいなと思っていて、運良く25歳のときに結婚しました。これもまた運良くすぐに子どもができました。40歳のときに離婚しました。子どもたちとは3か月に一回会っているんですが、いろいろ相談にのったりしています。子どもと過ごす時間はとても楽しく、大切な時間です。仕事はある面からみたらよいステップを踏んでいるように思えますし、実際充実しています。でも自分としては、家庭というものがないので、そういうものが欠落している人生が果たして幸せかと問われると、そうでもないんじゃないかという気がします。

50代 女性 A

50歳になったばかりです。結婚して26年、子どもは二人います。4年制の大学を出て、演劇関係の仕事につきました。結婚したのは23歳のときです。それから仕事は辞めずに続けて、28歳になつて第一子を出産するときに辞めました。そのまま仕事に戻ることはなく、29歳のときに第二子を出産しました。それからは子育てに専念していましたが、上の子が3歳半に

ように見える。私は二者択一ではなくて、新しい何かを自分でつくり出さなければならぬ第3の方法もあるんじゃないかと考えています。

40代 男性 A

44歳です。40歳で結婚しましたが、それまでは仕事優先でずっとやっていました。結婚する人も周りにあまりいなかったし、結婚をあまり意識していなかったというのが正直なところだと思います。ただ40歳が間近になってきたときに、社会的に疎外感を感じるというか、自分としての成長が感じられなくなってきました。それで、人生の次のステージに行きたいと思っていたときに、知人の紹介もあつて結婚に至りました。結婚したあとすぐに子どもが産まれたんですが、驚いたのがこれだけ情報化社会なのに、自分がいままで出産とか育児に関する情報に全く触れたことがなかったことですね。子どもは自分では何もできないので、ご飯を食べさせたり着替えをさせたり、24時間つきつきりで休みなく面倒みなきゃいけなくて大変でした。子育てはこうすればよいという正解がないし、その都度子どもと一対一で向き合つて対処していかなくてはいけないというのがとても大変。ただ子どもが成長していくのを見るのはとてもおもしろいですし、親としての視点というか、社会をもつとよくしていかないといけないとか、未来をつくつ

なつたときにアルバイトのような形で仕事に戻り、それからずっと仕事を続けてきて子どもも成人して、ある部分はやりきつたという感じで結構満足しています。

50代 女性 B

年齢は50代前半です。既婚です。子どもは二人います。仕事はずっと続けています。私の若い頃は、結婚して子どもを持つということが普通のことと、それについて迷うことはありませんでした。私自身は25歳で結婚して、28歳で第一子、31歳で第二子を持ちました。経済的自立がしたかったので、結婚・子育てと仕事をどうやって両立させていくかということが一番の課題でした。両立できるように公務員を仕事として選んだということもあり、何とか続けてこられました。職場環境として産休をとって復帰することが当たり前だったので、産休がたんですが、そうは言ってもまだ育児休暇はなくて、産まれて二か月ちょっとで子どもを預けて働いてましたから、それなりに苦労しました。いま思うと、もう少しゆつくり子育てをしたかったなというふうに思います。仕事自体はおもしろいしやりがいがありますが、でも本当に自分のやりたいことだったかな、という気は少ししています。子どもはもう大きくなつてしまいましたが、一番近い違う世代で、そういう世代と付き合えるという意味では子どもを持つてよかった

なと思いますし、いまでも楽しいなと思う部分はあります。

50代 女性C

57歳です。成人した子どもが二人います。大学を出てすぐに就職をして、27歳で結婚しました。一年半後に妊娠して専業主婦になりました。29歳で第一子、31歳で第二子を出産しました。第二子が一歳になる前に保育園に預けて働きはじめました。結婚したときは普通の家庭を築こうと思いましたが、いろいろな理由があつて10年前に離婚しました。子育てについては、本当に責任を持つてこの二人の子を育て上げなければいけないというのが自分の目標です。娘はすでに就職して自立していますが、まだ息子はそうではないので、あともう少し、息子を支援していかうと思います。そこが終わらないと、私の子育ては終わりません。でもそこが終われば、自分はまだ若いので、これから人生をどうやって生きていこうか考えています。

60代 女性

私は現在68歳ですが、小さい頃からずっと仕事は続けたいなと思つていました。明治生まれの親に育てられていたので、結婚や子育ても普通にするものだと思つていましたが、それと同時に仕事もしたいと思つていました。大学に行つて社会科学の教員資格を取りましたが、当時は全国の大学で学生闘争

が起こつた頃で、私もまさに渦中にいました。結婚したのは25歳でしたが、結婚するにも迷いがありました。というのは戸籍制度に反対していましたが、最初は籍を入れずにおこうと思つたんですが、27歳で第一子を出産したとき、子どもを非嫡出子とするのは酷だなと思ひまして籍を入れました。30歳で都立高校の社会科の教員になり、次女を出産しました。

33歳で初めて、産前産後8週間ずつの休暇をもらつて第三子を出産しました。37歳のときに教員を辞めましたが、当時その年齢で女性が再就職することは本当に難しかったです。二年間、パートタイムの仕事しながら職探しをして、39歳のときに人材育成の会社に入りました。その後45歳で横浜の男女共同参画センターに入り、定年まで勤めました。女性が仕事と家事育児を両立していくというのが私の中でもテーマだったので、キャリアアカウンセラーの資格をとつて現在その仕事をしています。

阿部

いかがでしたか？ 第一部では、みなさんそれぞれの個人的な人生の選択をフラットに見ていきました。続いて昼食を交えての第二部です。第一部で見てきたみなさんの人生の選択には、時代の影響も含め、どのような背景があつたのかを見ていただきましたと思います。第一部では年齢順に個人の歴史を見てきましたが、第二部では反対に、その背景を時代順に見ていただきます。

第二部 その選択の背景にあるもの

60代 女性

仕事のスタートとして教員をやつていたのは、当時女性が長く働き続けられる職業というと、公務員か教員くらいしか思いつかなかつたからです。

娘は3人とも0歳児保育で生後6か月からお世話になりました。子育ては大変でしたけれど、仕事は続けていきたいと思つていました。女性が子どもを産むことも自然なことだし、働き続けることも自然なことなのに、どうしてその両方が成り立たないんだろうと思つていました。中国のことわざに、天の半分は女性が支えるゝというのがありますが、女性が社会で能力を発揮するための仕事をしたいとずつと思つていて、いまもそれは続けています。

50代 女性C

私の時代は、短大を出て、一流商社に勤めて、24、25歳になると職場結婚して寿退社するというのが理想的な結婚像でした。

私は27歳になっても結婚していなかったのですが、周りからは早く結婚しろと言われました。男性も30歳すぎて結婚しないと一人前の人間ではないと思われていました。私の両親は男女平等に私を育ててくれたので、私もそういうものだと思います。いいますが、就職したら、仕事なんてとても女性にさせてもらえない。お茶汲みやコピー取りなど、男性の補助的な仕事しかできません。それには本当に愕然としました。寿退社はしませんでした。第一子の妊娠と同時に会社を辞め、専業主婦になりました。でもご飯をつくったり子どもの世話をしたりの日々の繰り返しがいやになってしまいました。やはり社会との接点を持って、自分も仕事を持ちたいと思って、子どもを保育園に預けて仕事をするという選択をしました。子育ても楽しみたいと思っていたので、非常勤でパートタイムで働いて、子育ても仕事も両方できました。

50代 女性 B

私が結婚した頃は、男女雇用機会均等法の施行の少し前で、女性は腰掛け的な働き方が当たり前。24歳が結婚のピークで、短大卒のほうが就職率がよかったですね。それは4大卒は短大卒より二年間働く期間が短くなってしまいうから。そういう時代でした。

私が経済的な自立をしようと思ったのには母の影響があります。そういう意味では結婚してよかったと思います。子どもを産んでからは子育てに専念していましたが楽しかったです。ただ上の子が3歳になったときに、そろそろ仕事したいなという気持ちになってきました。そこから子どもを預けてアルバイトのような形で働きはじめ、最初は満足のいくような仕事もできなかったけれど、子育てもしたかったです。仕事もしたかったし、中途半端な形でしたが私には両方必要でした。あと欲しいものは何でも手に入れていきたいという人生なので、段々に子どもが育つていけば大きな仕事もできるようになるし、そういう意味では、欲しいものは得られたなという感覚はいつも強くあります。

40代 男性 B

結婚も子どもを持つのも早かった理由としては、元奥さんが年上だったので子どもを持つことを急いだことがあります。あと自分は親がやや年を取ってから産まれた子なので、その裏返しで若い両親みたいなのに憧れていました。あともうひとつは、いまの若い人たちが持っているような将来に対する漠然とした不安がなかった。バブル世代なんです、楽に就職できましたし、何とかなるさという雰囲気でした。

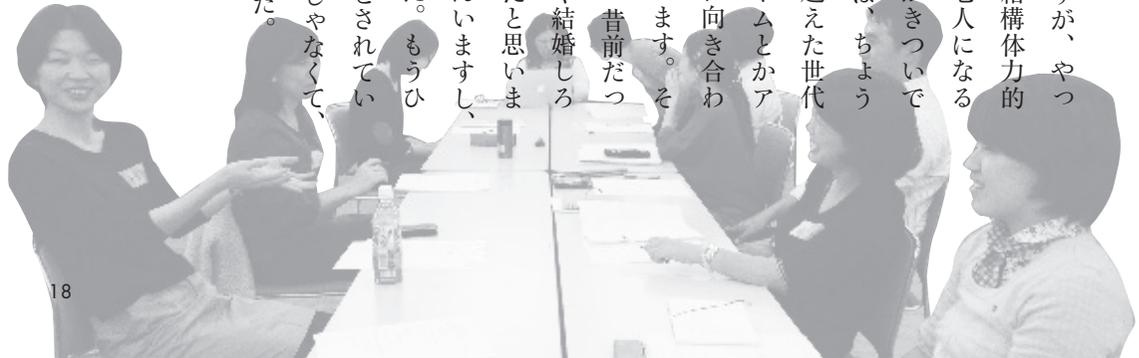
母の若い頃は戦争中で、もつと上の学校に行きたかったけど行けなかった。少し勤めてから結婚して専業主婦になりましたが、やっぱり自分も社会に出たかったという思いがあったようです。私は三人姉妹だったんですが、母は私たちに、女の子だからこそ勉強して仕事を持って、経済的にやっていけるようにならないといけない、とかなり小さい頃から言っていました。私たちもそれを受け止めて仕事を選びました。当時は女性が長く続けられる仕事というと、教員か公務員しかありませんでした。

50代 女性 A

私が就職したのは男女雇用機会均等法の一年前ですが、当時女の子は短大に行くことが多くて、女の子は大体26歳か27歳くらい、男の子は30歳までには結婚するような感じでした。ただ、そこまで結婚しろとうるさく言われる風潮でもなかったように思います。自分はいままで子育てして仕事も続けて、いろいろな転機がありました。その都度何とかかなるかなと思っていましたし、実際何とかなってきたというのがあります。結婚したのはすごく早かったんですが、結婚する前はそのまま一人で生きていけちゃうなというのが漠然とあつて、それはまずい、人と一緒に生きていくことが必要だし、そういう人間になりたいなと思ったのが、結婚したきっかけ

40代 男性 A

私は40歳すぎて結婚して子育てをしているわけですが、やっぱりもうちょっと早くてもよかったです。結構体力的にしんどいですし、子どもが成人する頃に自分が老人になることとか、親の介護が同時にきてしまうのでそこがきついですね。自分が晩婚・晩子育てになった理由としては、ちょうどバブル期の世代で、はじめて初婚年齢が30歳を越えた世代だったんですね。その頃は衛星放送とかテレビゲームとかアニメとか、いろいろなメディアが出てきて、自分に向き合わずに逃避できる環境があったというのがあると思います。それから、世間的なプレッシャーもあまりなかった。一昔前だったら、30歳で独身でふらふらしていると周りから早く結婚しろと言われたらうし、世話を焼いてくれる人もいたと思います。それが、我々の世代で結婚をしていない人はたくさんいます。それでよいとみんな思っているところもありました。もうひとつは、時代背景として尖ったことが「格好良い」とされてい





30代 女性 F

私たちの時代は不況で大きな会社に就職して出世するということがもう頭打ちで、自分の個性や特徴を活かすということを考えさせられる時代のはじまりだったと思います。いわゆるいままでの幸せだと思われていたことより、自分にとって何が大事かということが生きる上での選択としてありました。何とかその中で自分の得意分野を見つけて、将来につながるような満足感を得ることができました。またなぜこの歳まで独身で子どももいなくて、ということになってしまったかという点、個人的には子どもの頃から男の子になりたい願望があり、たとえば漫画の中に出てくる男の子と同じように活躍する女の子に憧れていました。そういう女の子は男勝りで、ちよつと結婚とは相容れなくて、どこか結婚や子育てについて「格好悪い」というようなイメージがありました。

30代 女性 E

結婚することも子どもを持つことも、それが当たり前だと思って、ご縁にも恵まれたのでそうになりました。仕事を続けたかったのは生活のためというのがありますが、社会につながっていたかったと言いますか、仕事もずっと続けるものだと思ってきました。

30代 女性 D

私はあたたかい家庭をつくりたかったし、経済的にはまだまだ不安でしたが、一緒になることで安定して楽しく暮らせるかなと思ったので結婚しました。子どもも、もともと好きだったので欲しいと思っていました。イライラすることもありますが、やはり子どもがいると楽しいですよ。新しい世界というか、知らなかったことを教えてくれます。

30代 女性 C

産んでみて、やはり20代で子どもを産むほうが、体力的なことや、人生のリスタートが早くなるといった意味で最適なかなと思いました。私が30代で結婚・出産することになったのは、自分の人生が仕事や趣味で充実していて、それがとても楽しかったので、結婚というものを重点的に意識して考えずにいたからです。友人がバブル世代の人たちで、その人たちの「何とかなるわよ」という背中を見ながらすごしていたから、楽しかったんだと思います。また私の周りで、30代だから結婚しなさいよという人もいませんでした。また個人的なことを言えば、弟がダウン症で、弟と人生をともにできれば私は満足だなというのが気持ちの中でありました。弟が社会的に弱い立場であることを守らなければいけないというのがあり、強

30代 女性 F

私たちの時代は不況で大きな会社に就職して出世するということがもう頭打ちで、自分の個性や特徴を活かすということを考えさせられる時代のはじまりだったと思います。いわゆるいままでの幸せだと思われていたことより、自分にとって何が大事かということが生きる上での選択としてありました。何とかその中で自分の得意分野を見つけて、将来につながるような満足感を得ることができました。またなぜこの歳まで独身で子どももいなくて、ということになってしまったかという点、個人的には子どもの頃から男の子になりたい願望があり、たとえば漫画の中に出てくる男の子と同じように活躍する女の子に憧れていました。そういう女の子は男勝りで、ちよつと結婚とは相容れなくて、どこか結婚や子育てについて「格好悪い」というようなイメージがありました。

30代 女性 E

結婚することも子どもを持つことも、それが当たり前だと思って、ご縁にも恵まれたのでそうになりました。仕事を続けたかったのは生活のためというのがありますが、社会につながっていたかったと言いますか、仕事もずっと続けるものだと思ってきました。

30代 女性 D

私はあたたかい家庭をつくりたかったし、経済的にはまだまだ不安でしたが、一緒になることで安定して楽しく暮らせるかなと思ったので結婚しました。子どもも、もともと好きだったので欲しいと思っていました。イライラすることもありますが、やはり子どもがいると楽しいですよ。新しい世界というか、知らなかったことを教えてくれます。

30代 女性 C

産んでみて、やはり20代で子どもを産むほうが、体力的なことや、人生のリスタートが早くなるといった意味で最適なかなと思いました。私が30代で結婚・出産することになったのは、自分の人生が仕事や趣味で充実していて、それがとても楽しかったので、結婚というものを重点的に意識して考えずにいたからです。友人がバブル世代の人たちで、その人たちの「何とかなるわよ」という背中を見ながらすごしていたから、楽しかったんだと思います。また私の周りで、30代だから結婚しなさいよという人もいませんでした。また個人的なことを言えば、弟がダウン症で、弟と人生をともにできれば私は満足だなというのが気持ちの中でありました。弟が社会的に弱い立場であることを守らなければならないというのがあり、強

30代 女性 A

私が就職した頃は、自己責任とか自己実現といった言葉が流行っていて、仕事を通して何者かになることが大事であると思っていました。その中には、結婚や出産といったことは入っていませんでした。また、親や周りから結婚しろとプレッシャーをかけられることもなかったため、先延ばしにしてい

ました。結婚や子育てについてそんなによいイメージもありませんでした。

30代 男性

私の職場には未婚の人がたくさんいますが、私は結婚もしたいし、子どもも欲しいと思っていました。その理由としては、自分自身がつと成長するためにも、結婚や子育てというプロセスを経ることが大事なのではないかと思っていたからです。独身のときは、自分一人の将来のことしか考えられなかったんですが、結婚してからは妻との将来、これから生まれてくるかもしれない子どもとの将来を考えられるようになって、それがとても幸せだと思っています。

20代 女性 E

結婚と出産と子育てについて考えられないのは、まだ社会に出たばかりで、ちゃんと就職しているわけではないというのが大きき理由の一つです。自分自身がどうなっていくのかよくわからないし、自分のことで精一杯なので相手のことまで考える余裕がありません。個人的な理由としては特に結婚に対してよい印象がないです。それは私の家族、親戚があまりよい関係ではなかったことや、私が子どもの頃、父の単身赴任が多かったのでなかなか家族一緒に過ごす時間がとれました。

ませんでした。最近になって、親と将来の夢を共有したりとか、そういうことができるようになってきて、子どもを持つても、子どもと一緒に成長できるんじゃないかと思うようになってきました。それで子どもが欲しいなと思うようになりました。

20代 女性 B

私は人生の中で結婚も出産もしないと考えています。その理由は父親と母親の関係を見ていて、父親は団塊の世代ですが亭主関白で、母親が人生を搾取されているような感じがしてそれが影響しているのかもしれない。育児に関してはまだ私が未熟で、子どもと遊んでいるときも、遊んであげているのではなく一緒に遊んでいるという感覚が強いので子育ては考えられません。

20代 女性 A

子どもを産みたくないと思っていた理由は、母が元オペラ歌手だったんですが、子どもを産んで家庭を築きたいから、舞台に出るのをやめました。そのことを母はすごく幸せだと言っていたんですけど、私にはそれがそんなに幸せには見えなくて、表舞台で活躍している母の姿が見たかったという思いがありました。そういう母の影響もあって、子どもを育てて幸

なかつたということがあります。「夫婦っていいな」「家族っていいな」と感じたことがないので、自分も結婚して幸せになるのが想像できません。いま子どもができてしまつたら、まず私が不安なのは、虐待をしてしまうのではないかと。私と同じ世代の人たちやもつと若い人たちが育児ノイローゼで子どもを殺してしまつたりとか、赤ちゃんポストを使つて子どもを放棄したことをニュースで聞いたりしますと、いまの自分が不安なので、その不安なものを子どもにぶつけてしまうのではないかという思いがすごく大きくあります。

20代 女性 D

時代からどんな影響を受けたか？というのですが、いまその渦中にあるのかなという感覚があつて、正直どんな影響があるのかわかりません。でもちよつとだけ感じるのは、個人とか個性とかを求められてきた部分があつて、すごく自分のことしか考えられなくなっているのかなと思います。

20代 女性 C

私の場合、母親が自営業で自分のやりたいことを好き放題やつていて、がんばればそんなふう生きられるというモデルがあるので、結婚や子育てがあるからといってキャリアの心配はあまりしていません。前は子どもが欲しいとは思って

せな家庭を築くには、家の中に入らなきゃいけない、ある意味社会にはつながつていられないイメージがあつたので、それは嫌だなと思つてました。仕事を続けて活躍するか、子どもを育てるかという二択だつたら、私は仕事を続けて活躍したい、子どもはいらな思つていました。

阿部

以上、第二部のインタビューでは、第一部で一見バラバラに見えるていた個人の選択が、実は世代によって、その時代や社会的な背景に大きく影響を受けていたことがわかりただけなのではないかと思つています。そこでここからは、観客のみなさんにもご参加いただいて、ちよつと乱暴な区切りではありますが、20代、30代、40代、50代、60代と10年単位で世代ごとになわかれて、それぞれの時代背景と個人の選択についてグループでお話しいただきたいと思つています。



《ディスカッション》

20代女性 結婚・出産という選択に関して、20代だからということではなくて、家庭とか親とかの背景があって、個人個人の考えがあるのではないかという話になりました。個人的な感想としては、私自身は20代の人たちは結婚や出産に対して消極的なものだと思っていたのですが、実際に話を聞いてみると、みなさんすごく前向きに考えていることに驚きました。

30代女性 私たち30代グループは、結婚や出産ということが、実際の経験も通してリアルに感じられ、考えられるようになってきています。「ロストジェネレーション」という共有している時代感はありませんが、経済的な問題に対しても、人によって楽観的に考えていたり不安を感じていたりと捉え方が違いますし、その中で結婚・出産に踏み切るかという選択もそれぞれでした。

40代男性 40代は、よく言われるほど「バブル」という時代の恩恵を受けたわけではないけれども、やはりいろいろな人生の選択肢があつて、それぞれに充実した人生を送ってきていると思います。がどれだけ子どもたちを包み込むかということが、子育てにはすごく大事だという話が出まして、みんなで共感しました。

阿部 ありがとうございます。このワークショップをはじめた頃、集まった20代女性の全員が、結婚・出産に対して否定的な考えを持っていたことに、私はとても驚きました。そこで理由を聞いたのですが、彼女たちが口を揃えて言うのが、結婚や子育てにはマイナスのイメージしかないということです。メディアなどを通して得る子育てに関する情報も、児童虐待や育児放棄などのニュースばかりで、自分も子どもを産んだら虐待してしまうかもしれないという不安があるという声もありました。観客席にいる20代のみなさんはこれ聞いてどのように思いますか？

20代女性 確かにマイナスイメージの情報が多いとは思いますが、でもいまの私は仕事もしたいし結婚もしたい、子どもも欲しいというふうに、人生に対して欲張りな気持ちです。でも虐待してしまうかもしれないと考える人のほうが、真剣に子育てについて考えているかもしれないな、とも思います。

す。どんな選択をしたかによって婚期も大きくわかれていて、早い人は25、26歳くらいで結婚しているし、遅い人は40代になってから結婚し、いま幼い子どもを育てています。

50代女性 50代は、子育ての仕上げの時期だったり、早い方はもうお孫さんがいたり、子育てを終えた自分の人生について考えたりする世代です。この世代は結婚して子どもを育てるのが当たり前。でもいまの若い世代は結婚をするのも自由、子どもを産むのも自由、自分で決定し、自分で責任をとらなければいけない。だから若い人たちは悩んでるんじゃないかと思いました。若い世代の結婚・出産の時期が遅いということに対して、どうしてなのだろうと疑問を持っていましたが、彼らの状況、そしてその背景にある考えや、時代的なものに触れることができました。

60代女性 60代グループ4人のうち3人は団塊の世代です。この世代は、時代的には日本が高度経済成長に進んでいる時期に当たりますし、親世代に対して自分たちは違う生き方をするという選択をした世代です。その私たちが話し合う中で、地域の人との目線、子どもと親という縦方向の関係だけではない斜めの目線

《今の20代にとって人生の選択肢が多いのは可哀そうなの？》

20代女性 今日の機会に聞いてみたいことがあります。上の世代の方々は、それぞれが人生を自由に選択できる社会をつくってくださった。いまの私たちは選択をできることが当然だという中で生きているわけですが、今度は「いまの人は何でも選択して決めなくてはいけないので可哀そうだ」と言われる。今日話し合っている中で、私はそのことが一番ひっかかったのですが、私たちはこれから何をしても可哀そうなんでしょうか？

50代女性 可哀そうだとは全然思っていないくて、「若い世代は選択肢がたくさんあっていいな」「うらやましいな」という気持ちです。ただ私たちの時代は選択するにしても二者択一で、どちらをとるかでよかったのが、いまは10個や20個の選択肢の中から自分の生きざまを考えて見据えて選んでいかなければならず、それによって評価されてしまうきつきがあるのではないかな、とは思っています。私はその中で若い世代がどんな選択をしても見守るよ、ともにがんばっていいよね、という気持ちです。

50代女性 私も可哀そうだとは思っていません。30年前よりも人生の選択の幅が広がっているのは確かです。その中で迷うことが可哀そうという意見もあるのかもしれないけれど、もし選択に迷ってどうしたらよいかわからなくなっている20代がいるのだとしたら、人生に幅広い選択肢がある時代に、自分でしっかり選択ができるような教育をしてこなかった我々上の世代にも責任があるのではないかと思います。どんどん変化する世の中の渦中にいる若い世代の声に、上の世代が耳を傾けないといけないとも思います。自分の子育てを考えてみても、自分の子どもでありながらやはり理解できないことができてきます。いままではそれを、世代が違うのだからとあきらめる気持ちがあったのですが、今回のワークシヨップを通してあきらめずに理解しようとするきっかけを得たような気がします。世代間の交流というのは言葉で言うのは簡単だけれど、現実にはそういう場を持つのは難しいので、こういう場合は貴重だと思います。

40代男性 このような、地域の寄り合いのような場では、若い世代は経験豊富な上の世代にいろいろなことを言われるものです。

うして男性にはその質問がないのか。私はそれがとても疑問なんです。そしてこういう話をしていると大概の男性は逃げていきます(笑)。どうやったら男性に逃げていかれることなくその話を進めていけるのか。男性の方、なにかよいアイデアはないですか？

《男性の子育て参加について》

40代男性 私は一般企業に勤めているサラリーマンですが、いまお話にもあがっていたとおり、職場の先輩方は子育てのことは奥さん任せにしてしまっているし、仕事と子育ての両立で悩む話は一切出てきません。子育ては自分の問題なのだというのを男性自身が自覚することが大切だと思うし、自覚した人が周囲にそれを伝えていく必要があると思います。

30代女性 私は主人の転勤をきっかけに仕事を辞め、大阪からこちらに来ましたけれど、極端に言えば主人を取るか仕事を取るかという選択なので、やはりすごく悩みました。お父さんが子育てに関われない時期もありましたが、いまは私が週末、意識的に家を空けて、お父さんと子どもが二人きりになる時間をつくるように

これまで経済的な活動を優先させてきたので、世代を越えた交流の場というのは本当に少ない。いま、またこういう別の形でその場をつくりなおすことで、若い世代が上の世代への疑問の声を上げながら成長する、これは健全な状態なのではないかと思いましたが。

阿部 20代の方が結婚・出産にマイナスイメージしかないという場合、なぜそうなったのか、我々上の世代はその状況に対して何ができるのかということは、やはり考えなくてはいけないと思います。家庭ってよいものだよということを伝えるにはどうしたらよいか。たとえばこの場所はそれを伝えられる場所になっていると思います。

もうひとつ、ここに今日集まっている女性のほとんどは仕事もして、子どもも産んでいる方です。先ほどのインタビューでも、子どもを産み育てることも自然なこと、仕事をすることも自然なことなのに、どうしてこんなに両立が難しいのだろう、という声がありました。これはすごく大きな問題で、しかも女性に限ったことです。男性で仕事か家庭かで悩むという発言をしている人はいません。なぜ女性だけがそれを背負わなくてはいけないのか。ど

しています。まあ家の中はぐちゃぐちゃになったりしますが(笑)。

30代男性 子育てをするときに、男性はいままで自分がやってきた生活が全く変わらずにできるなんて思わなければいいし、女性は女性で、子育てをしたら自分のいままでやってきたことがすべてなくなってしまう、変わってしまうのだと思わないでほしいです。相手を大事にしたいと思う気持ちがあれば、家族が増えても、きつとベストな方法が見つかるんじゃないかなと思っています。

阿部 今日はありがとうございました。ここまで「子育てをめぐる人生」について大人の話をしてきましたが、最後に「子ども」という存在に立ち返って、ここにある『はじめての妊娠・出産 安心マタニティブック』という本のリーディングを参加者全員でおこなって、この会を終わりにしたいと思います。この本は、受精の瞬間から出産までの赤ちゃんとお母さんの体の変化を、一日ごとに紹介したものです。スクリーンに映し出される映像は、「エコー写真」とよばれるもので、今日ここににいる子どもたちが、お母さんのおなかの中にいたときの写真です。

リーディング

「2週。 妊娠したかもしれない最初に思ったのはいつですか？」

今日、あなたの卵子とパートナーの精子が結合して、ひとつの細胞が作られました。接合体と呼ばれる、まだほとんど肉眼で見ることのできないこの細胞は、これからの数カ月間で、あなたの娘か息子へと成長していきます。このはじまりの過程を「受精」と呼びます」

「お母さんの変化。振り返ってみて、あなたはこの日を覚えていませんか？」

人によっては排卵した時を実際に感じる人もいますし、そうでない人もいます。膈内に放出された精子は、約12時間かけて卵子に達します。億を超える数の精子が卵子に向かって泳いでいくにも関わらず、たったひとつの精子のみが卵子の表皮を突き破ることができるのです。受精の過程にはたくさんの細胞が関わり、たくさんの活動が行われますが、あなたがこの動きを感じ取ることはおそらくないでしょう。体内で日々営まれている赤血球の生産や細胞の動きを感じることができないのと同じように」

「3週。 おめでとうございます！ ついにあなたの体は正式に赤ちゃんと対面しました。あなたと赤ちゃんはしっかりとつながり、赤ちゃんの成長をサポートし始めました。まだ実感はわかりませんが、妊娠してすでに一週間が経過したのです」

「4週。 赤ちゃんの変化。赤ちゃんの頭からお尻までの長さは1〜1.5mmほどになりました。ボールペンのペンの先に乗るくらい大きさです。頭の部分になる、シワのような壁がはつきりとしてきます。細胞の中央部が急速に成長するため、いまの胎芽は脊椎の原形を中心に内側に折れ曲がっています。中枢神経系も作られ始めます」

「お母さんの変化。乳房に変化が起こってくる人がいます。妊娠初期には、おっぱいがほてったり、チリチリしたりすることがあります」

「9週。 赤ちゃんの変化。赤ちゃんはいま、約22〜24mm。10円玉くらいの大きさです。鼻はずんぐりとしていて、目には大量の色素が沈着。舌の表面には味覚をキャッチする器官が作られてきます。指が一本ずつ離れてきました。この時期の足先は扇のような形をしており、指はまだ水かき状のままです。手のひらも足と同様の状態です。今日か明日には、耳の外側が完成するでしょう」

「お母さんの変化。妊娠が進むにつれて、ママの体には色素沈着などの変化が目立ってきます。シミが新たにできたり濃くなったり、乳輪の色が濃くなっているのに気づいた人もいるでしょう。でも、こうした変化は一時的なもの。出産後には元に戻ります。子宮はニワトリの卵くらいの大きさになりました」

「13週。 赤ちゃんの変化。手がさらに発達し、よく動くようになりました。親指をほかの指と分けて使うこともできるようになります。これからの3日間で、女の子の体の表面に出ている生殖器は、男の子のものとはつきり見分けがつくようになります。今週、男の子は亀頭が成長します。この成長が止まると、亀頭を覆う包皮が形成されます」

「お母さんの変化。つわりがおさまり、妊娠していることにも慣れてくると、食欲がわいて気分もよくなり、妊娠生活が楽しくなってきました。健康で、栄養バランスのよく取れた食事を心がけ、無理をしすぎないように注意すれば、快適な妊娠生活を送れるでしょう」

「15週。 赤ちゃんの変化。赤ちゃんはいま、身長はおよそ120mm、体重は1000gくらいにまで成長しています。この二週間で二倍にもなった計算です」

「お母さんの変化。子宮の向きが変わり、膀胱への圧力が減るため、頻繁にトイレに行く必要がなくなりそうです。この時期を楽しみましょう。妊娠後期に入ると、トイレに行く回数が再び増えてきます。便秘にも気をつけましょう」

「20週。 赤ちゃんの変化。お腹の赤ちゃんが、脳や筋肉の命令に合わせて体勢を変えたり、トンボ返りをしたりと、いろいろな動きができるのは、羊水に浮かんでいるからです。また羊水は、胎児の成長や発達に重要な役割を果たします。たとえば、羊水のおかげで、胎児は温かくて清潔な環境に身を預けることができますし、羊水を飲むことによって、消化や排泄の練習をすることもできます」



「お母さんの変化。今日から妊娠6カ月。体調や気分が安定し、妊娠を楽しむ余裕が出てくる頃です。妊娠期間に幸せを感じられることは、きっとその後の育児にもいい影響をもたらすはず。一日一日を大切に過ごしていきたいでしょう」

「24週。赤ちゃんの変化。子宮の外で生き抜くために必要な反射神経をきたえる練習が行われます。赤ちゃんの唇や口はとても繊細で、口の近くに手がくると、指をくわえたりすることもあります。ビックリした時に起こる反射作用もあります。この時期までには、大きな物音を立てた時にお腹の赤ちゃんが飛び跳ねる感じを、多くのママが経験していることでしょう」

「お母さんの変化。きちんとした食事をしていても、ときには消化不良や胸やけ、膨満感、腸にガスがたまる感覚に悩まされるかもしれません。これらは、妊娠によるホルモンの増加で筋肉がゆるむために起こるものです。なるべく消化のよいものを食べるようにしましょう」

「28週。赤ちゃんの変化。この時期の赤ちゃんの目は、光や暗さに対し、とても敏感になっています。でも、まだ物を認識することはできません。生まれてからいろいろなものを見ることによって、その力を獲得していきます」

「お母さんの変化。妊娠当初、ママの子宮は約55gでした。それが、妊娠が終わる頃には985g近くにまで成長します」

「31週。赤ちゃんの変化。五感はすでに発達していますが、感覚によっては、その機能を実際に試す機会が限られています。子宮内での赤ちゃんは肺呼吸をしていないので（つまり、鼻から息を吸い込まないので）、嗅覚はあまり発達しません」

「お母さんの変化。出産予定日が近づくにつれ、ママの体は出産に向けての準備を始めます。なかでも、子宮の筋肉はこれまで以上に収縮と弛緩を繰り返すので、お腹の張りを頻繁に感じるようになるでしょう」

「38週。赤ちゃんの変化。この時期の子宮には、赤ちゃんが手足を動かすスペースがほとんどないので、動か

す時はぎこちない動きになります。パンパンに張ったお腹を見たりさわったりすることで、胎児の手足の位置を推測するのは意外と簡単。でも、頭とお尻を区別するのは難しいでしょう」

「お母さんの変化。この頃までには、主治医から、本物の陣痛と、そうでないお腹の張りや痛みについて説明を受けていることでしょう。本物の陣痛ではないお腹の痛みの場合、それは下腹部に起こります。それに対し、子宮の収縮に伴う本物の陣痛の痛みは、腰のあたりから始まり、その後、下腹部に広がります。子宮内の圧力がピークに達すると、それは約30〜50秒間続きます」

「40週。赤ちゃんの変化。今日はお母さんの赤ちゃんの出産予定日です。お腹の赤ちゃんは、生まれる前になされるべき発育はすべて完了したのです。赤ちゃんによって個人差はありますが、平均的な大きさの赤ちゃんは、3000gを超え、身長は50cm前後にまで成長しているでしょう。出生時の赤ちゃんは、平均的に男の子のほうが、女の子よりも少しだけ身長も体重も大きいようです」

「お母さんの変化。特別な日を迎え、きつとソワソワ落ち着かないことでしょう。この時期になると、体が重くて何をするのも大変だし、寝つきも悪くなっていることでしょう。ようやく眠れそうだと思えば、赤ちゃんが動き出したり、お腹が張ったりして、結局眠れないかもしれません。休める時に休み、リラククスしましょう。この時期は、決まった生活習慣をこなしていくのは難しいことです」

陣痛が規則的になったのはいつですか？

そのとき、あなたはどこで何をしていましたか？

陣痛はどのようにしてこられましたか？

子宮口が全開大になったのはいつですか？

赤ちゃん誕生の瞬間にはだれが立ち会いましたか？

赤ちゃん誕生の瞬間、あなたはどのように感じましたか？

赤ちゃんが生まれてすぐにしたことは何ですか？

へその緒はだれが切りましたか？

出産直後に赤ちゃんを抱きましたか？ どんな気持ちになりましたか？

構成・テキスト 阿部初美



「はじめての妊娠・出産 安心マタニティブック
—お腹の赤ちゃんの成長が毎日わかる!」
A.Christine Harris 竹内正人監修/永岡書店

参加者の声

「子どもを持つつていいな」と思えるようになりました

池上綾乃

大学3年生の私には出産・子育てなんてまだ関係ないと思っていて、考えたいと思っていたわけでもないのですが、そういう人こそ参加するとよいと知人に勧められて参加しました。はじめの頃、参加者が連れてきた赤ちゃんをじっと見て観察し、赤ちゃんの気持ちを考えたり、それを言葉に言うてみたりするプログラムがありました。正直そのときはおもしろいと思わなかったのですが、何度かワークショップに参加して赤ちゃんと一緒にいる時間をすごすうちに、ふと電車の中でお母さんに抱かれている赤ちゃんに目がとまり、そのたび彼らに反応するようになりました。そうなるのはじめて、いままで私が見つかなかっただけで、結構な頻度で赤ちゃんを見かけているのだと驚きました。そして、改めていままで自分が赤ちゃんや幼児、そのお母さんに無関心で視界に入っていなかったことに気づき、その無関心さの原因は、現在の私のライフワークの中に彼らとの接点がないことにあるのかもしれないと思いました。このワークショップでは、そういった普段の生活の中で接点がない人たちの話をたくさん聞きました。最初は、産後の体の状態や子育ての楽しさ、悩みなどを大学生の自分が聞いていることに違和感がありました。私がまだ知らない世界の話でその場が盛り上がっていて、いつか私も同じような悩みを持つのもかもしれないと思うと、これからの人生をのぞくような感覚でもしろかったです。

私は当初、仕事を続けて社会で活躍したいから子どもは欲しくないと思いい、子どもを持つことに対して漠然とネガティブなイメージを持っていました。でもみなさんの話を聞いて仕事か子育てか二択で考える必要はないと感じたし、何より、子育てしている、またはしていた人たちと一緒に話す時間を持てたことで、「子どもを持つつていいな」と思えるようになりました。私の中で大きな変化だったので、そう思えたことがすごく嬉しいです。

ワークショップの持つ力

蓮池奈緒子

職業柄、ワークショップを企画することはあっても一個人として参加したことはありませんでした。今回参加したいと思ったのは、成人した一人の子どもを持つ私が50歳になり子育てを振り返りつつ自分自身に向き合いたいと感じていた時期であり、このワークショップが生み出すものを体感として得てみたかったからです。

阿部初美さんとの対話では、現代社会における子育ての問題点を浮き彫りにしつつ、その裏にある社会の変化やある種の病巣、そして個人の深層心理を暴かれ気づかされました。これは恐ろしい体験でもありました。また多様な世代のワークショップ参加者との討論では、価値観の相違や、息苦しさを感じながら生きていく若い世代を目の当たりにしたことを覚えています。彼らが既成の価値観を自身の価値観と同化しているのではないかと危惧を持つこともありました。私自身を含め回を重ねることに参加者が自分の心理と改めて向き合い変化していったように思います。最後の発表会で参加者が緊張感を持って朗読し一体感を得られたこと、そして観客の方々とも議論ができる形式だったことにこのワークショップの今後の可能性を強く感じました。

今回のワークショップがパッケージ化されたものの提供ではなく、参加者と創作していく演出家・阿部初美さんの作品であったことは明確でした。ワークショップに参加することで個人に帰するものが多くあるのは当然ですが、ワークショップの開催自体が社会を変革する小さな動きであることを信じこの記録集がそのような動きに繋がることを参加者として望んでいます。

自己実現的な社会への疑問

森 隆一郎

ドキュメンタリー演劇の旗手である(と、僕は思っている)阿部初美さんが、子育てをテーマに行うワークショップ。最初は仕事現場として見学する予定だったのが、結局は参加することになった。

結論から言うと、本当にいろいろなことに考えがおよび、正直まだ整理がついていない。例えば、僕はワークショップの中で、「子どもをつくると、キャリアアップできないからあきらめるしかない」という若い女性の意見にショックを受けた。阿部さんは、「日本は男女平等だと思っていたが、子どもを育ててみて全然違うとわかった」と言った。「キャリアアップ」ってなんだ、「男女平等」ってなんだ、そんな疑問がよぎる。「キャリアアップ」による「自己実現」は男性的社会の幻想のひとつじゃないか。「男女平等」というレイヤーと並列で、違いを認め合い補い合う多様性社会のレイヤーが存在するはずだ。でもそれって、昔の日本社会そのものじゃないか。と、こんなふうに頭が整理できていないのだ。

6年前に離婚を経験し、二人の子どもの親権を手放した。その後、新劇場の立ち上げというやりがいのある仕事に没頭した。そんな自分は「自己実現」的な生き方をしているのかもしれない。ではそれで幸せかと問われると、首を縦には振りづらい。マズローの唱える「社会的な自己実現」を達成したからといって、それが幸せを導くとは限らない。子育ては未来創りだ。そもそも子育てが社会から隔絶する行為になること自体がおかしい。

光明はこのワークショップのような世代をまたいだ意見交換や交流がおこなわれていることではないか。このちいさなアーティスト・ジョンが、引き続き市井の疑問に丁寧に向き合っていく場であってほしいと願いつつ、僕の頭の整理はつけないまま阿部さんの新作を待ちたい。

世代間の差の大きさを実感

石川佳代

私がこのワークショップに魅かれた理由は3つ、①アートから子育てワークショップを考える発想が新鮮だったこと、②フリーランスのキャリア・カウンセラーとして、子育て中の女性のための連続講座「ココロにきくサプリ」をやっているので、地元の高島でも、自分ができることはないかと考えたこと、③孫の世話をしている現役「イクバア」として、何か吸収できるものがあるので、はと考えたことです。

参加して得た一番大きいことは、阿部初美さんの「子どもを産んでみたら、ものすごく世界がたくさん見えてきた、絶対作品の質が変わる」という言葉です。出産・子育てはアーティストに限らず、どんな仕事でもプラスになると思うけれど、「ツトメ人」の場合、いままでフルタイムで働いていた女性の7割近くが、退職してしまう現実です。待機児童の問題は少しずつ解消されつつあります。この上は、長時間労働を当たり前とし、「生産性」や「効率」を最優先する考え方に対して、子育てで仕事の質が変わり、豊かな発想を引き起こすことを、もつとうまく表現して伝え、周囲の共感を得ていかないと、なかなか子持ちの女性が活躍できるような社会に変わっていかないと思います。どうやって表現していくかが今後の私の課題です。

さらに、いままであまり考えたことがなかった、世代間の差の大きさを実感したことです。これは20代から60代まで、様々な年齢層の女性、男性と、ゆったりとした雰囲気の中で、何の構えもなくゆるゆる話せたからでしょう。せわしい日々の中、こんな時間と空間が持てたのは貴重でした。

こういうワークショップは「ありだ」と思いますので、阿部さんの「女性の演出家で子持ちで活躍している現役はいない」という言葉の重みをかみしめ、それに果敢に挑戦している阿部さんの活躍にエールを送ります。発表の日には3人の娘も参加し、場を共有できたことは嬉しかったです。日頃娘たちと面と向かって子育て、孫育てについて話すことはなかったのですから。最後にこの企画・運営に携わったスタッフの皆様、お疲れ様でした。どうぞお元気で活躍くださいませ。

40代女性

2010年春、わたしは一人の男の子を産んだ。40歳になる数か月前だった。

演劇人が子どもを産む割合は、その他の職業の人々と比べてかなり低いと思われる。理由はもちろん経済的な問題、それから就労時間が不規則で長いので、とくに女性の場合、キャリアの中断につながりやすく、復帰が難しいという事情もある。

こんな「子育て」とは無縁の演劇界にとっぷりつかって、わたしは20年近くを独身で生きてきたわけだが、その間、結婚や出産という選択肢を除外したり諦めたりしていたわけではない。むしろ結婚もしたかったし、子どももいずれば持つことになるのかななどとぼんやりと思っていた。しかし20代を修行時代として忙しく過ごし、30代に入ってからようやく演出家としての本格的な活動がはじまったこともあり、とてもプライベートにまで気がまわらず、30代後半になるまでなかなかご縁に恵まれずにきてしまったのだった。

38歳になって、やっとご縁に恵まれた、と思つたら、ほぼ同時に子宝にも恵まれたのでとても驚いた。結婚後も「子どももいずれば」などと、いまふりかえれば悠長すぎるほど悠長にかまえていたので、自分が子どもを持つということには全くリアリティがなかった。ところが、妊娠がわかるとすぐ、体に異変が起こりはじめた。当たり前にできていた仕事思うようにできなくなり、周囲から激しい非難をあびたが、仕事はすでに年度末いっぱいまで詰め込んでいた。苦しい体にむち打ちながら出産ぎりぎりまで仕事を続け、40歳になる数か月前、やつとのことで出産を終えた。

つかの間のよろこびに満ちた静寂。「聖夜」はどんな子どもも誕生にも訪れる。

「赤ちゃんがいる生活ってどうなんだろうね?」「生まれたらずっーといるんでしょ? こういうときも」妊娠中、夫とよく話して

いたが、二人ともさっぱりイメージがわかかなかった。でもひとつだけ予感していたこと。それは、これからしばらく仕事で外に出かけることはないということ、そしてそれは子どもの頃から家でじっとしていることが苦手だった自分にとって、かなりの苦痛に違いないと思われることだった。仕事は復帰のメドもない。自分の人生がいったいどうなってしまうのか、抗いがたい大きな力によって、全く予測不可能なところに引きずり出されてしまったような感覚だった。

産後、最初の一か月は夫と離れ実家に里帰りしてすごしたが、体調はなかなか戻らず、授乳のトラブルもあり、精神的にも不安定になりがちで、ことあるごとに自分の両親とぶつかっていた。最低限のことは産院で習ったけれど、赤ちゃんのお世話はわからないことばかりで、静かに眠ることなどほとんど泣き続ける赤ちゃんを、口喧嘩しながら一回しに抱っこする日々だった。

両親とのぶつかり合いに辟易して自宅に戻った後も、赤ちゃんはいつこうに泣き止まない。近所には知り合いもなく、相談できる友人もない。夫の仕事は多忙をきわめ、振替休日なしで土日も出勤の日々が続く。泣きやまない赤ちゃんと密室に二人きり、ひたすら授乳やオムツ替えなどの単純労働に追われ、赤ちゃんのそばを離れられず、家事すらままならず、睡眠不足のまま、息つく暇のない緊張は続き、月日は遅々として進まない。赤ちゃんはかわいいでしょうとよく言われるが、かわいいと思う余裕など全くなかった。

こんな生活から、わたしは「育児ノイローゼ」や「虐待」が起こる背景を、身をもって知った。それは全く特別なことではなく、悪い状況が重なればどこにでも起こりえることだと思つた。こんなふうに母子の密室での孤立を「母子カプセル」と言うそうだが、わたしたちはまさにその状態だったのだ。

そしてさらに仕事への復帰のメドがたたないことにも追い打ちをかけられていた。

このままわたしは「演出家」ではなくなっていくんだろうか。同世代の男性演出家たちは子どもを持つてもなんの支障もなく仕事のキャリアを続けている。どうしてわたしが女性であるというだけで仕事を奪われなければならないのか、本当に理解に苦しんだ。

ただし、もし仮に仕事を続けられていたとしても、体は相当きつかっただろう。

外の世界では、こんな子育ての苦しい状況とは無関係に、演劇はあいかわらず上演され続けていた。しかしそれはこの苦しみを

救ってくれるものではなくなかった。そして自分も子どもを持つ前は、なんの疑いもなく、そんな演劇をつくり続けていた一人だったことに気づかされていた。

こうして産後ほぼ一年の間は、希望も見えず、矛盾した怒りや悲しみを抱え、時々泣きわめき爆発しながら、待ったなしの子どもの世話に追われていた。

それから事態はさらに悪化する。子どもが一歳を過ぎた頃から、慢性的な睡眠不足と疲れやストレスで免疫力が低下し、子どもと一緒にいろいろな病気にかかるようになった。授乳中は服用できる薬も少なく、わけもわからず動き回りところかまわず泣きさけぶ子どもを連れて病院に行くことも難しかった。子どもの世話のために休んだり眠ったりすることもできない。病状は悪くなる一方で、とうとう子どもと一緒に再び実家で面倒をみてもらわなければならない事態がやってきた。このときは、こんな年になつて面倒をみてもらえる実家があることのありがたみをつくづく感じた。しかし高齢出産のリスクは、こんな状況もいつ逆転するかかわらず、子育てと介護を同時に迎えてしまうこともあり得るということである。それまでそんな認識すらわたしにはなかった。

それから実家での一か月におよぶ療養生活を終え、再び自宅に戻ってしばらくしたある日のこと、世田谷パブリックシアターの学芸員のKさんから、「お願いしたい仕事がある」とひよっこり連絡が入った。自宅までわざわざ訪ねてくれた学芸のお二人の、「どうなの最近?」と言う言葉と同時に、わたしは堰を切つて話し続けた。大人とこんな話をするのは何か月ぶりだっただろう。「でも仕事はいつでもできるじゃない? それにくらべて子どもは持てる時期が限られてるんだから、それだけで幸せじゃない」学芸のEさんの言葉は、産後初めての救いの言葉だった。また同じ頃、北九州芸術劇場の学芸のMさんからも、「出産育児を表現に活かす」をテーマに勉強会をやつてほしいという依頼が入ってきた。

子育てしながらちゃんと仕事もできるのかという不安はあつたが、この二つのお誘いには本当に救われる思いだった。この頃、一つの諦観のようなものが自分の体に落ちてきているのを感じていた。それは悲観的なものではなく、むしろ肯定的なものだった。日本社会は、しよせん子どもを持つ女性は男性と同じ土俵では渡り合えないようにできている。ならばそこでたたく必要はない、自らそこを「降り」て、自分の仕事や居場所を新たに探したりつくつたりすればいい。演出家の仕事は劇場で作品を

上演するだけではないし、これからは何をしてもいいという自由を手にいれたと思えばいい、と。

そして久しぶりに再会した以前の仕事仲間の佐藤慎也さんから、としまアートステーション構想での仕事のお誘いを受けたのもこの頃だったと思う。まだ少し残っていた「作品をつくらなくても演出家でいられるのかなあ?」というわたしのためらいに、佐藤さんは「僕は建築家だけど、建築はつくつてないよ」と、励ましの言葉を返してくれた。彼も二児の父親である。

気がつくとも時間が経っていた。子どもも間もなく二歳になろうとしていた。言えはわかることや、自分でできることも増え、子育てはそれまでと比べると少しずつ楽になってきていた。苦しいことも多かつたけれど、子どもとすごした時間からはずいぶんいろいろなことを学ばせてもらったと思う。子どもという存在を通して、社会の見え方もだいぶ変わった。それはわたしにとって、片目で見えなかつた世界が両目で見えるようになった、くらしいの大きな経験だった。

以上、とりあえずここまでがお恥ずかしいかぎりではあるが、「子育てをめぐる人生」の一つのサンプルとしての、わたしの個人的な人生である。

「子育てを考えるワークショップ」世田谷パブリックシアターからの出発

世田谷パブリックシアターからは、「子育てを考える」をテーマに演劇ワークショップをやつてみないか、という連絡が入った。ひさしぶりに体にエネルギーが流れるのを感じた。演劇を「子育て」の役に立てられる日がやつと来る。

どんな時間と空間がつけられるだろうか。まずはせせない条件は、子どもを排除しないこと、そして参加者を母子に限定しないことだ。子育て中の母子の孤立は、子どもを連れて出かけられる場所がとも少ないことも原因になっている。それから自治体がよく企画する母子を対象にした交流会やイベントでは、情報交換の相手を見つけられることもあるが、ママ友をつくらなければと焦つたり、無理なママ友つきあいがかえつて負担が増えてしまうこともある。

女性のキャリアの中断、男性の育児参加の不足、母子の孤立、世代間の衝突、ママ友問題、子どもとの接し方、子育て周辺には本当にたくさん問題がある。そんな状況を少しでもよりよく変えていくためには、母子だけを集めても難しい。現在子育てまつただ中の人も、ある程度終わった人も、これからの人も、子育てとは無縁の人も、いろいろな立場の人が、子どもがうろちよろす

る中、「一緒に「子育て」について考えられるようなゆるゆるとした時間と空間。そんな場がくれたらいいと思った。

ということ、「子連れ参加OK」、対象は「子育てに関心のある方ならどなたでも」となった。「一般向けや学校でのワークショップの経験から、演劇を通してなら世代を越えた無理のない関係がつくりやすいということもわかっていた。とくに最後に発表会をもってきた場合、その効果は倍増する。しかし子連れ参加の場合、免疫のない子どもは病気にかかりやすく、予想外のトラブルも起こりやすいので、毎回の参加はたぶん難しい。なので、会期中からや一回だけの参加もOKということで、ワークショップははじまった。

やってきたのは、乳幼児を連れて母親やイクメン、未婚や既婚の20代―40代、子育て支援活動をする60代などの人々だった。プログラムは参加者の関心事から、「20代が子どもを持つことの経済的困難」「ママ友つきあいが苦手」「女性が育児しながら仕事をすることの難しさ」「親であるなしに関わらず」大人として子どもと接したらいいのかわからない」などのテーマを取りあげ、グループワークの人形劇をしながら全員で考えた。問題の原因はなにか、現状にプラスの側面はあるのか、よりよくするにはどんな方法があるのか、などなど。この方法は世田谷の参加者によく合っていた。

毎回参加者が入れ替わるこの方法では、最後に発表会を行うことは難しく、それは実現できなかったけれど、回をおうごとに参加者は辛づる式に増え、最後にはワークショップの継続を望む声も多く寄せられ、やはり世代や立場をこえて「子育て」を共有できる場が必要とされていることを強く実感した。

「としまで子育て」

さて、ここでやつと、としまアートステーション構想」としまで子育て」である。

まず、「としま」では世田谷でできなかった発表会を実現させるため、実験的に参加者を固定してみた。すると、子育て真っ只中の人々が毎回確実に参加するのはやはり難しかったのだろう、子連れの参加者はぐつと減り、そのかわり20代、30代、40代、50代、60代と、「タテ」に広い年齢層が集まった。そのせいもあって、テーマは「子育て」をめぐるそれぞれの生き方にまで広がっていった。ワークショップ初日に、女性のキャリアアカウンセラーとして働く60代の石川佳代さんから、「若い人が自分の人生を考える上で

の情報が足りていない、アメリカでは家庭科の教科書に、学生たちが自分のライフプランを考えるためのサンプルが書かれたものがあり、自分はそれを翻訳しようと思った」という話が出た。だったらそれをここでつくってみようということで、参加者全員が「子育てをめぐる自分の人生の選択と結果」をサンプルとして差し出して、若い世代や未来の子どもたちへのメッセージをつくることになった。

本当に、現代を生きるわたしたちは人生について知らないことが多い。例えば、まず結婚とはどんなものなのか、自分の両親以外のサンプルをほとんど知らない。それから若いうちに子どもを持つとその後の人生はどうなっていく可能性があるのか、逆に高齢で子どもを持つとどうなるのか、ぼんやりと想像はできても具体的にはほとんどなにも知らない。

「としま」ではいろいろなプログラムを試しながら、発表会に向けて「子育て」についての表現を探っていた。そして一ヶ月後、それぞれの参加者の状況を考慮した上で、実現可能な表現の形としてたどりついたのは、証言映像の上映会だった。20代から60代までの参加者に先述の「子育てをめぐる自分の人生」について語ってもらい、それを撮影、編集し、上映会とオープンディスカッションをセットにして発表会とすることに決め、プレインタビューを開始した。

すると、ワークショップの中で20代の「結婚や出産、子育て」についての考えに対して、40代から疑問や批判的な意見があがったことがあったが、インタビューを通して、そのような世代間の考え方の違いがはっきりと現れてきた。そこにはすごしてきた時代背景の大きな違いがあり、それはこれだけ育ってきた時代の背景や常識が違えば、親子ですら理解し合えないのは当然だと思えるほどのものだった。

例えば「子育て」でよくある話だが、祖父母世代は、「生活がこんなに便利になって、自分たちの時代よりよっぽど恵まれているのに、なぜ親（祖父母世代の子ども）世代がそんなに子育てを大変がるのか理解できない」と言う。いま現在の祖父母世代をだいたいい50代以上とすると、この人々が結婚や出産を経験した時代には、「女性は結婚したら家に入って子どもを産んで家事育児をする」ことや、「子育てが大変」なのは「当たり前」という認識があった。

そして親世代の方を現在の40代以下とすると、この世代は男女雇用機会均等法の後、男女平等教育を受け、女性も男性と同じよ

うに働くことを「当たり前」としてすごしてきた。そして結婚して子どもを産んだとたん、いきなり男女不平等の世界に引きずり込まれ、軽いパニックに陥るのだ。「子育て」がどんなものか、「子ども」とはどんなものなのか、予備知識も覚悟もなしに子どもを持つてば、それも当然かもしれない。そして生活が便利になり、日常を忍耐なしにすごせるようになったからこそなおさら、思うようにならない子どもという存在を前に右往左往してしまうのかもしれない。いろいろな世代の参加者の話を聞くうちに、わたしも自分自身の経験にだんだん整理がつけられるようになってきた。

そもそもこの背景や常識の違いを意識せずに、異なる世代が対話するのは不可能なのではないだろうか。

発表会の目的がもう一つ増えた。それは、人生のサンプル集を若い世代や子どもたちへのメッセージにするだけでなく、それを使って都市部が失ってきたタテのつながりや対話の場を再び創造すること。

それには世代間の考えの違いとその時代背景の違いをあきらかにしてみせること、そこに対話や相互理解を生む鍵があると考え、それをポイントにわたしたちはインタビュアーの撮影を開始した。

都市部ではとくに若い世代ほど、成長の過程で親と学校の先生以外の大人と接する機会が少なくなっているのではないだろうか。ワークショップの参加者同士が「親戚よりちよつと遠いくらいの感覚でみなさんとこんな話ができるのはとても嬉しい」と言い合っていたが、いま、こんなふうな家庭でも職場でもなく、ほとんど利害関係のない場所で、一人の社会人として、生活者として、ともに生きることにについて語り合えるような場はたぶんあまり存在していない。しかしこういう場こそ、いま、わたしたちにとって本当に必要な場なのだろう。

発表会のタイトルは「ランチ de デイスカッション 結婚・子育て、どう考えてますか？」に決まった。

当日、会場には参加者の家族、知人友人など、総勢60名を越える人々が集い、地域の寄り合いのような、なんだか不思議な時間と空間がそこにできた。参加者も観客もスタッフも一緒にお弁当を食べながら、結婚や子育てをめぐる人生について話をした。そこで上映されたインタビューとその後のデイスカッションの具体的な内容はこのドキュメントの中で紹介されている通りである。ということであつたし個人の人生も、「としまで子育て」という企画が生まれたいきさつの紹介も兼ね、そのサンプルの一つとしてこの文章の冒頭に並べさせてもらった。

発表会は思うようにいかない部分もあつたけれど、その様子をみてわたしは、社会の中にもつともつとこういう場ができたらいのにと心から思った。そうしたら「子育て」も「人生」もつともつと実りの多い豊かなものになっていくだろう。

わたし自身も、アーティストとして、一人の親として、ここで「子育てをめぐる人生」について多くのことを皆さんと共有し、学ばせていただいたことに本当に感謝している。

こうして世田谷パブリックシアターからはじまった「子育てを考えるワークショップ」は、としまアートステーション構想「としまで子育て 子育てを考えるワークショップ」に引き継がれ、その後、北九州芸術劇場「産み育てをみんなで考えるワークショップ」、水戸芸術館「産み育てを考えるワークショップ」につながり、広がっています。

最後になりましたが、「としまで子育て」は、わたし自身が現在子育て真っ只中ということもあり、使える時間やできることが限られる中、としまアートステーション構想事務局スタッフの皆さんのご理解とご協力があつて実現した企画でした。そのほか、豊島区の子育ての状況についてお話をお聞かせくださった豊島区文化デザイン課の八巻課長をはじめ、豊島区と東京文化発信プロジェクト室の皆さん、NPO法人アートネットワーク・ジャパンの皆さん、ご自分の人生を惜しげもなくサンプルとして提供して下さった参加者の皆さん、映像上映とオープンデイスカッションにご参加くださった皆さん、このドキュメントを作成して下さった皆さん、この企画に関わつてくださったすべての皆さんに、あらためて感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございます。



©Takaki sudo

阿部初美(演出家)

故太田省吾に師事後、2000年より演出家として活動。S・ベケット後期作品を多数演出後、06年より、にじろがも創造舎レジデントアーティストとして、ドキュメンタリー的な作品『4・48サイコシス』『アトミック・サバイバー』ワーニャの子どもたち』『エコノミック・ファンタスマゴリア』を東京国際芸術祭などで発表。東京藝術大学、山口情報芸術センター、いわきアリオスなどでも講師を務める。10年に出産。現在は育児をしながらワークショップを中心に活動中。

「としまで子育て 子育てを考えるワークシヨップ」は、最近の公共劇場・ホールにおいて、教育普及活動の「環」としておこなわれている演劇ワークシヨップと形式的には違いがない。しかし、今回のワークシヨップ(以下、WS)は、「としまアートステーション構想」という文化事業の中に位置付けられているという意味で、大きな違いがある。

阿部初美はこれまでに、自殺や孤独死をテーマとした『4・48サイコシス』(2006)や経済をテーマとした『エコノミック・ファンタスマゴリア』(2008)といった、社会的課題を扱う「ドキュメンタリー演劇」を手掛けてきた。中でも、原子力発電所をテーマとした『アトミック・サバイバー』ワーニャの子どもたち』(2007)は、上演当時には滑稽に思えた原発での作業シーンが、福島第一原子力発電所事故を経たいまとなつては、取材によつて描かれた真正正銘のドキュメンタリーであったことが痛感できる作品である。阿部の作品の特徴は、たとえ原発という課題であっても、単純に賛成や反対という立場を採るのではなく、その両者を平等に描くことによつて、その課題そのものを考えることを観客にうながすことにある。そして、例えば『アトミック・サバイバー』でチェーホフの『ワーニャ叔父さん』が選ばれたように、さらなる問題への異なる視点を導入するために、既存のテキストが重要な要素として持ち込まれる。

今回のWSのテーマとなった社会的課題は「子育て」である。阿部も2010年に出産、自身もまさに子育て中であり、同時にいわゆる演劇作品の現場からは少し離れた生活を送っている。そんな中、私自身が阿部の作品にスタッフとして関わっていたこともあり、阿部との個人的な会話をきっかけとして、今回のWSが実現することとなった。これまでの阿部の作品は、観客に対して、ある社会的課題を複数の視点から多角的に考えさせることを意図するものだった。そうだとすると、客席に座っている受動的な観客よりも、演劇WSへの能動的な参加者の方が、より直接的にそのことを受け止められるのではないだろうか。そして、最後にパフォーマンスを伴った発表会をおこなうことで、より確実に多角的な視点を手に入れることができるのではないだろうか。

今回のWSでも「子育て」をめぐつて、様々に異なる年齢、性別の意見が提示された。それらは、どちらが正しく、どちらが正しくないかと単純に対立するものではなく、その違いが起点となつて対話が生まれるきっかけをつくり出している。そして、発表会のエピローグでは、『はじめての妊娠・出産 安心マタニティブック』(クリスティーン・ハリス、竹内正人訳)という育児書から、胎児の成長を描くテキストの参加者によるリーディングがおこなわれた。まさに、これまでの阿部が手掛けたドキュメンタリー演劇と同じ要素が用いられている。

一方で、参加者の能動的なWSにおけるアウトプットは、やはり阿部の(あえてこの言葉を使うが)演出による結果であろう。WSの構成、進行を含め、阿部の演出なしでは、このような対話を生むことはできなかった。そう考えると、その演劇に関わった人たちに意図を届けるという意味では、いわゆる演劇作品も演劇WSも違いはない。むしろ、身体的にも届けることができるWSこそが、これからの新しい作品のかたちと言えるのかもしれない。

今回のWSを企画した「としまアートステーション構想」は、そんな劇場や美術館の外に出るアートによつて、市民による主体的な文化活動がはじまることを意図している。次なる活動をおこなう市民を育てるという意味では、受動的に客席に座る観客よりも、能動的にWSに関わる参加者こそが、その担い手となることが期待される。そして、阿部のWSによる世代を超えた対話の場の創出は、この構想にとつて重要な意味を持つ。だからこそ、阿部のWSは、単なる演劇WSを超えた、新しいドキュメンタリー演劇としてつくられ、これまでの阿部作品の延長に位置付けられるだろう。もちろん、構想の意図を考えれば、声高に「作品」であることを主張する必要はない。しかし、これからの文化事業を考える「としまアートステーション構想」では、こんな新しいかたちのアート作品の登場を必要としている。

佐藤慎也

としまアートステーション構想ディレクター。建築家、日本大学理工学部建築学科准教授。建築に留まらず、美術、演劇作品制作にも参加。『4・48サイコシス』美術(阿部初美演出、2006)、『アトミック・サバイバー』ワーニャの子どもたち』宣伝美術(阿部初美構成・演出、2007)、『+1人/日』(2008、取手アートプロジェクト)、『3331 Arts Chiyoda』改修設計(2010)、『完全避難』マニユアル東京版『地図製作監修(高山明構成・演出、2010)、『墨田区/豊島区/三宅島在住アートレウス家』ドラマトゥルク(長島確構成・演出、2010〜12)など。

基本データ

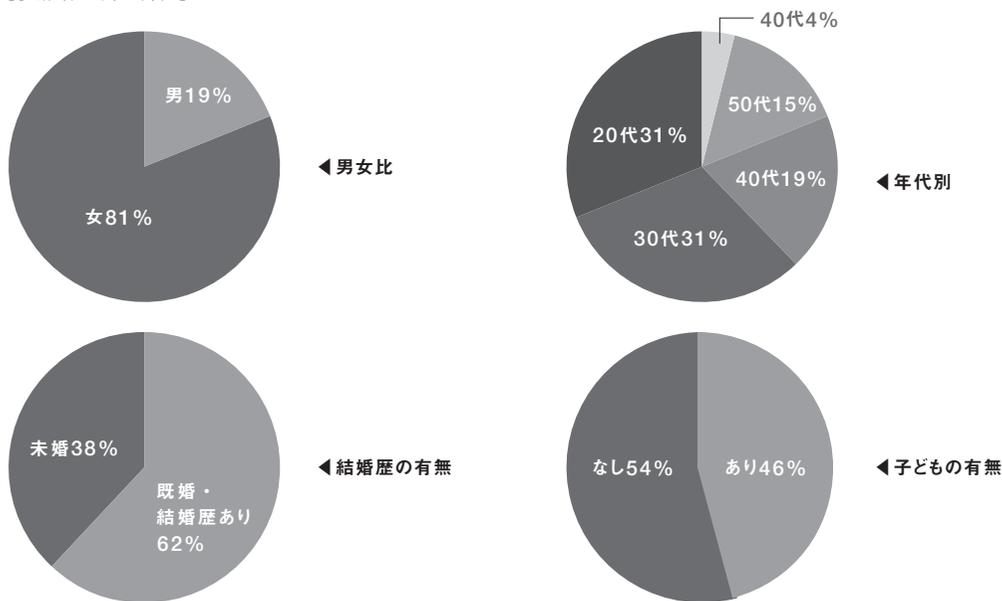
「としまで子育て 子育てを考えるワークショップ」

アーティスト：阿部初美（演出家）

主催：東京都、豊島区、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、特定非営利活動法人アートネットワーク・ジャパン

■ ワークショップ	
実施日時	2012年9月6日(木)、15日(土)、20日(木)、29日(土)、10月4日(木)、18日(木)、20日(土)、27日(土)、11月8日(木)、18日(日) 10:00-13:00(全10回)
会場	としまアートステーション「Z」、雑司が谷地域文化創造館（多目的ホール、音楽室）
参加者数	9月 ……6日(木)―12名／15日(土)―9名／20日(木)―11名／29日(土)―10名 10月 ……4日(木)―9名／18日(木)―11名／20日(土)―6名／27日(土)―5名 11月 ……8日(木)―6名／18日(日)―8名
■ 発表会 ランチ de ディスカッション	
実施日時	2012年12月2日(日) 11:00-14:00 (第一部 11:00-11:50／第二部 12:05-14:00)
会場	としまアートステーション「Z」
参加者数	62名
映像出演	池上綾乃、石川佳代、籠景美、鬼澤舞、佐々木亜希子、佐々木誠一、菌部伸悟、土本広美、鄭晶晶、雷樫由美、中西典子、新妻葉子、蓮池奈緒子、長谷川三保子、福井千也子、宮崎あかり、森隆一郎、山崎友貴

[参加者傾向・属性]



アンケート

■ワークショップの参加者

- 毎回参加して、日々の生活では得られないたくさん刺激をもらえてグルグルしてました。他の方の話を聞いて吸収できて、すごくよい時間をすごすことができました。
- 他の世代がどういふ考えを持っているかを理解できた。公の場で自分の意見を発信することは今までなかったので、自分の人生を「振り返る」ことができた。
- 子育てについて語り合う場がなかなかないので、こういう機会はもっと増やして欲しい。

■発表会の来場者

- 他世代の考え、男性の考えを聞くことができてよかったです。他区なので私の住んでいる区でもこのようなワークショップがあればよいなと思いました。
- 全員の意見を聞けなかったのが残念でしたが、リアルな声が聞けてよかったです。

■としまアートステーション構想

豊島区民をはじめ、アーティスト、NPO、学生など多様な人々が、区内各地域の様々な場所で、自主的・自発的にまちなかにある地域資源を活用したアート活動の展開を可能にする「環境システムの構築」と「コミュニティ形成の促進」を目指しています。人と人のつながりのある地域には安心感があります。豊島区をそんな街にしておくために「アート」を用いた試みです。雑司が谷の元カフェスペース、としまアートステーション「Z」を拠点に活動を展開していきます。

本事業は豊島区文化政策推進プランのシンボルプロジェクトである「新たな創造の場づくり」のプログラム及び東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指す東京文化発信プロジェクト事業「東京アートポイント計画」の一環として、NPO法人アートネットワーク・ジャパンとの連携により実施しています。

■としまアートステーション「Z」

雑司が谷にある千登世橋教育文化センター内の元カフェスペースを、としまアートステーション構想の拠点として活用しています。スタッフの集う場であり、区民とアーティストの情報交換・交流の拠点です。今後は、コミュニティカフェの機能を持ち、アート活動をはじめたい人の相談窓口など、より多くの区民を巻き込むことのできる開かれた場になることを目指しています。

阿部初美「としまで子育て 子育てを考えるワークショップ」ドキュメント

子育てをめぐるタテの対話

2013年3月28日 発行

監修 佐藤慎也

編集 としまアートステーション構想事務局

写真 としまアートステーション構想事務局

アートディレクション 三宅理子

印刷 シナノ印刷

発行 としまアートステーション構想事務局

〒171-0032

東京都豊島区雑司が谷3-1-7

千登世橋教育文化センターB1F

としまアートステーション「Z」

©2013 Toshima Art Station KOSO